

社会科部実践② 中学校 第1学年 「アジア州」 7時間

目標 巨大な人口を抱え、近年急速に経済発展を遂げるアジア州の地域的特色を理解する。

時

学習活動の概要

指導上の留意点

単元を貫く問い

中国の地域格差の問題の解決策を、「情報通信技術（ICT）の活用」の視点から考えよう。

ポイント1
「地域格差」という視点で、
アジアの特色を追究する。

単元を貫く問いに迫る問い【第1段階 1・2時間目】

アジア州には、どのような地域格差があるのだろうか。また、なぜ、そのような地域格差が見られるのだろうか。

ポイント2
3つの段階で単元を貫く問いに迫る問いを設定。

① (ねらい) アジア州の自然環境、気候について、地図やグラフを活用して調べ、その特色を明らかにする。⇒**地域格差が大きい**

- ・地図、統計資料の読み取りから、アジア州の自然環境、気候、産業の様子を大観する。
- ・雨温図を活用して、地域による気候の違いを調べる。
- ・地域による気候の違いを、自然環境や風の影響から考える。
- 地名や統計資料を調べたり、グラフを読み取ったりして得た知識をもとに、それらがどのように関連しているのかを考えさせることで、個別の知識の構造化を図る。

○アジア州の自然環境、気候の様子を調べ、地域による違いを明らかにしよう。

アジア州の主な山脈、高原、砂漠、河川を調べると、東部、内陸部、西部によってどのような特色が見られるでしょうか。また、その特色は各地域の気候とどのように関係しているのでしょうか。

「アジア州は東西にわたってとても広い」
「内陸部は高い山脈や高原、砂漠、東部は大きな川と平地が広がっているね」

○どこにどのような自然環境が見られるかを大観するだけでなく、地域（東部・内陸部・西部）によってどのような特色があるかをとらえられるようにする。

分類

- ・東部は大きな河川と平地が多い
- ・内陸部は山脈と高原が多い
- ・西部は砂漠が多い

「熱帯から寒帯まですべての気候が見られるよ」
「降水が東部と内陸部・西部とで大きく違うね」
「降水量の違いは、何と関係しているのだろうか？」

○降水量の地域による違いに着目し、その理由を先に明らかにした各地域の自然環境の特色との関係から考えられるようにする。

比較・総合

ヒマラヤ山脈によって海から吹く季節風がさえぎられるため、東部は降水量が多く、内陸部・西部は降水量が少ない。

②

(ねらい) アジア州の人口分布の様子を、自然環境・気候・産業などとの関連から多角的に判断する。⇒**地域格差が大きい**

- ①資料を活用して、人口分布の地域による違いを調べる。
- ②人口分布の地域による違いの理由を、前時の学習内容や農業との関連から考える。

○人口分布の地域による違いを調べ、自然環境・気候・産業との関連を考えよう。



アジア州の人口分布は地域によってどのように違うでしょうか。また、人口分布が地域によって大きく異なる理由を、自然環境・気候・農業・資源の分布の資料から考え、説明しましょう。

「特に人口が集中している地域は、東アジア、南アジア、東南アジアにあるね」

「内陸部や西部は人口が少ない地域が多いね」

「大きな川や降水量が多いところに集中するのは」

「農業に適した気候であること」

「鉱産資源がとれるところではないか」

○4つの資料を活用することで、人々の生活と自然環境、産業との関連を多角的に判断できるようにする。

○人口分布が地域によって大きく異なる理由を、前時の既習知識を活用して説明することで、知識をさらに発展・進化できるようにする。



比較・総合

水の得やすい(降水量の多い)農業がさかんな地域、交通の便がよく暮らしやすい平地の、人口が多く分布している。また、資源の分布とは必ずしも一致しない。

単元を貫く問いに迫る問い【第2段階 3時間目】

なぜ、中国には沿岸部と内陸部との間に大きな格差が見られるのだろうか。また、なぜ、そのような地域格差が見られるのだろうか。

③

(ねらい) 「巨大な人口と広大な国土」をもつ中国の自然環境、気候、農業の多様性を、資料の読み取りを通して理解する。また、人口が沿岸部に集中している理由を、多角的に判断して理解する。⇒**地域格差が大きい**

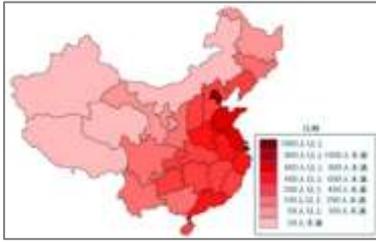
- ・中国の自然環境、気候の様子を大観する。
- ・中国では、地域によってどのような農業が発達しているかを調べる。また、その理由を考える。
- ・人口が沿岸部に集中している理由を、適切な資料を選択・活用して考え、説明する。

○沿岸部と内陸部との間に大きな格差がある理由を考えよう。



中国の人口分布と所得の分布は、地域によってどのように違うでしょうか。また、沿岸部に人口が集中している理由を、適切な資料を選択・活用して考え、説明しましょう。

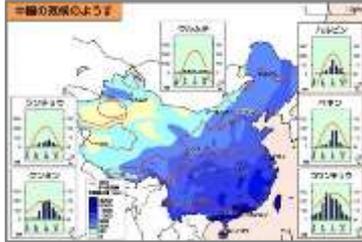
【中国の人口分布 (2014 年)】



【中国の所得分布 (2014 年)】



【提示した資料】



中国の農業地域



中国の経済特区



- 「人口も所得も沿岸部に集中しているね」
- 「川もあるし降水量も多いからね」
- 「農業がさかんで食料が豊富だからかな」
- 「山岳部よりも平地が暮らしやすいからじゃないかな」
- 「外国との貿易がしやすいからね」



・資源が豊富で貿易のしやすい沿岸部に経済開発区が設けられたことにより、沿岸部は急速に経済発展が進んだ。
 ・経済発展にともなって、沿岸部の交通が発達し、人口集中が進んだ。

○既得した概念を活用することで、生徒自身が中国の人口分布の地域格差の理由を説明できるようにする。他の要因があることに気付かせ、このあとの学習につなげる。

単元を貫く問いに迫る問い 【第3段階 4時間目】
 中国の地域格差は、どのような問題を引き起こしているのだろうか。

④ (ねらい) 中国の急速な経済発展の様子を、様々な資料を読み取り工業化と関連付けて理解し、それにもなって起こった問題の原因や影響を多面的に考える。⇒**地域格差の是正が必要**

- 中国の急速な経済発展の様子を、各種工業製品の生産額や経済開発区の設置の資料から理解する。
⇒世界の工場
- 経済開発区が沿岸部に設けられた理由を、既習内容や外国との関係から考え、発表する。
⇒平地が多い、豊富な資源、貿易がしやすい
- 沿岸部に人口が集中することで起こる問題を考える。

○経済開発区の設置や交通の発達の様子を示すことで、人口や所得分布の格差の理由を工業化と関連付けて理解できるようにする。

○人口が集中することによって起こる問題点を明らかにすることで、生徒自身が「地域格差の是正」という中国の抱える課題を見出すことができるようにする。

○「世界の工場」とよばれる中国の経済発展の様子を知り、それによって起こった中国の課題を考えましょう。



中国の経済発展の様子は地域によってどのように違うでしょうか。また、この地域格差は、沿岸部にどのような問題を引き起こしているのかを考えましょう。



- 環境問題(大気汚染, 水質汚濁など)
- ゴミ問題
- 住宅問題
- 就労, 労働環境問題

「人口が集中する沿岸部と内陸部との経済格差を是正することが必要だ！」

⑤

(ねらい) 中国の地域格差の是正という課題を、「情報通信技術の活用」という視点から、より良い解決策を考えることができる。⇒**地域格差を解決しよう**

- 中国の経済発展にともなう地域格差の現状と課題点をふり返る。
- 中国の経済発展にともなって、人口が流出している内陸農村部ではどのような問題が起こっているかを知る。
- 内陸農村部の生活を大きく変えた「農村タオバオ」の仕組みを理解するとともに、(小学5年で学習した)情報通信技術の役割をふり返る。
- 農村部の抱える課題の解決策を、「農村タオバオの情報通信技術」の活用から考え、説明する。

○情報通信技術を活用して、内陸農村部に暮らすリーさんの生活をより良いものにしよう。



「内陸農村部に暮らすリーさんの手紙」から、内陸農村部にはどのような解決すべき課題点があるでしょうか。また、「情報通信技術の活用」からそれらの課題の解決策を考えましょう。

「交通の便が悪い」

「働く場所がないから沿岸部に出てしまう」

「人口が流出してしまい、学校や先生が少ない」

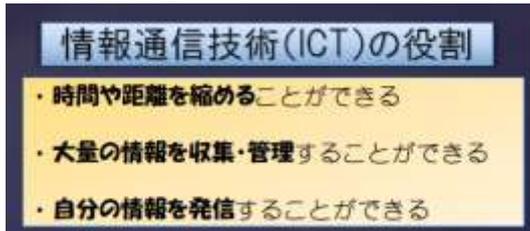
「高齢化が進んでも医療が受けられない」

「出稼ぎのため、親に会うことができない留守児童の増加」

【農村タオバオとその仕組み】



【情報通信技術の役割】



ポイント3
小学校第5学年社会科で
習得した概念の活用。

「市場が小さい農村部でも、ネットを活用することで、人口の多い地域に農産物を販売することができる」

「人口流出によって、学校が近くになかったり先生がいなかったりする地域でも、タオバオに通うことで授業を受けられるようになる」

「医療機関とつながることで、遠方の病院に行かなくても診察を受けたり、薬を購入したりすることができる」

「情報通信網を整備することで、物や人を運ぶ道路や鉄道に代わって時間や距離など多くの問題を解決することができる」

「工場を作ることは難しくても情報通信技術を学ぶことで、農村部でも仕事をすることができ、人口流出を抑えることができる」



地域格差を解決する一つの手段として、中国では農村タオバオが公的機関に代わって様々な分野で必要とされるサービスを実現している。

物流機能(販売代行)や農業技術訓練、医療サービス、顧客の開拓、雇用の創出、地域活性化など、公的機関が担うような役割も担っている。

84万人の雇創出。雇用対策として政府からの支援も受けている。

⑥

(ねらい) 他のアジア地域では、経済発展にともなってどのような地域格差が見られるか。

⑦

また、地域格差が引き起こす問題を、「情報通信技術の活用」という視点から、解決することができるだろうか。

- ・ 東南アジア、南アジア、西アジアの発展の様子と、地域格差の現状と問題を調べる。
- ・ 地域格差の問題の解決策を、「情報通信技術の活用」という視点から考える。

～ポイント解説～

ポイント1 「地域格差」という視点で、アジアの自然・気候の特色を追究する

ポイント3 小学校第5学年社会科で習得した概念を活用する

社会科における汎用的な概念を形成するための単元構造

本単元の学習では、①3年間の学習との関連を見据えた単元構造、②これまでに身に付けた社会的な見方・考え方を働かせて問題解決する力を育む単元構造として、アジア州の地域的特色を地球的課題である地域格差に常に着目しながら学び、その問題の解決を「情報通信技術（ICT）の活用」という視点から考えることで理解することを目指した。単元を貫く問い「中国の地域格差の問題の解決を考えよう」を常に意識しながら学習を進めることで、自然環境、産業の様子、人口の分布、経済発展の様子を、生徒自身が「地域によってどのような違いがあるのか」、「その違いの要因や背景にはどのようなことがあるのか」という視点をもってとらえるようになっていった。

単元を中心となる時間には、小学校5年生での既習概念である「情報通信技術（ICT）の果たす役割」を活用して、中国における地域格差の問題の解決策を「情報通信技術（ICT）の活用」という視点から考えた。グループ1は、働く場所がなく都市部に人が流出している問題の原因を、山岳部の交通の便にあるとした。そこで、都市部と農村部とを情報通信技術（ICT）を活用して結び、技術を学ばせることで内陸農村部でもできるICT関連の仕事で雇用を増やすことを提案した。（表1）グループ2は、山岳部にはない道路の代わりに果たすのが情報通信網であり、これを整備することによって、あらゆる距離や時間の問題を解決できるのではないかと説明した。グループ3は、内陸農村部は工場を作るには不利な条件が多いことから、情報通信技術（ICT）を使って他の地域とつながることができれば、この地域にしかないものを作って販売する新しい産業を生み出せると提案した。（表3）

一方で、グループ4のように、情報通信技術（ICT）の活用といえばインターネットショッピングというイメージから離れられず、就業、教育、医療の問題をすべてインターネット上の売り買いで解決できると考える意見も多く見られた。（表4）また、情報通信技術（ICT）が国民生活に果たす役割についても、これまでの学習状況や生徒自身の情報通信技術（ICT）の活用状況によって大きな差があることが明らかとなった。小学校第5学年社会科の学習では、販売業、運輸業、観光業、医療や福祉の5つより選択して、情報が国民生活に果たす役割を考えさせることになっている。そのため、中学校で活用するにあたっては、改めて生徒の学習状況や実態把握の上で既習概念を明確にし、情報通信技術（ICT）の役割を共有する必要がある。

ポイント2 3つの段階で単元を貫く問いに迫る問いを設定する

「単元を貫く問い」と「単元を貫く問いに迫る問い」の工夫

中国における地域格差は、地理的要因だけでなく政策的な要因からも考える必要がある。また、生徒が課題意識をもって主体的に追究する姿を目指し、3つの段階で単元を貫く問いに迫る問いを設定した。

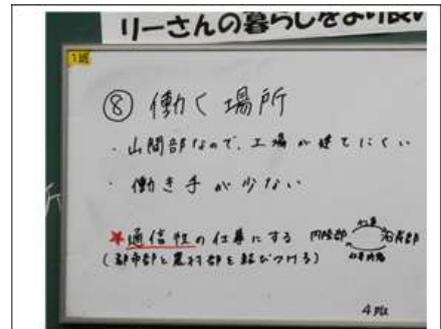


表1 グループ1の発表の内容



表2 グループ2の発表の様子

2. 課題の解決策を考えよう		
①番号(課題)	②原因(学習した内容から)	③解決策(ICTの活用方法)
⑧ 働く場所	山間部は、工場が建てにくい。働き手が少ない。	ICTを使って工場を都市部に移す。働き手も都市部から集まる。

3. ふりかえり(なぜ、「農村タオバオ」は中国の農村部に広がったのだろうか?)

農村部には道路がないから、インターネットを使って商品を売ることができたから。

表3 グループ3の考え

2. 課題の解決策を考えよう		
①番号(課題)	②原因(学習した内容から)	③解決策(ICTの活用方法)
⑤	両親の働く場所がない。	ネットで買った商品をタオバオで販売する。
②	材料が手に入らない。高価な材料が手に入らない。	タオバオで材料を買う。
⑦	内陸部は道路がない。	タオバオで必要な生活品を買う。

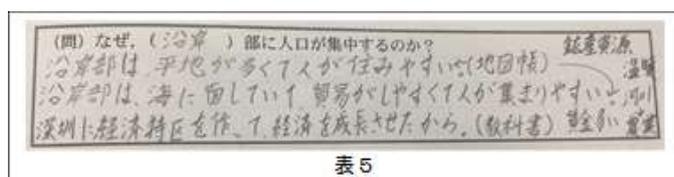
表4 グループ4の考え

①「アジア州にはどのような地域格差があるだろう。また、なぜ、そのような地域格差が見られるのだろう」
(第1段階、1・2時間目)

自然環境、気候、農業、資源の分布という視点からアジア州のようすを明らかにした結果をもとに、人口分布の地域格差との関連を説明する活動を行った。グループで話し合った結果、グループ1の「大きな山や砂漠などが広がる地域に比べ、平地は交通の便もよく住みやすいことから人口が集中している」、グループ2の「暖かく降水量が多いところは農業が発達するから多くの人が集まっている」に見られるように、どのグループも適切な資料を活用して人口分布の地域格差の要因や背景を考えることができていた。また、「工業がさかんな地域ではないかと考え、資源の分布を調べてみたが必ずしも資源の分布と人口の分布は一致しなかった」ことに気付き、工業化の進展には交通の便など他の要因があることを指摘していたグループもあった。

②「なぜ、中国には沿岸部と内陸部との間に大きな格差が見られるのだろう」(第2段階、3時間目)

次に、中国に焦点をあてて前時までと同様の学習を行った。前時までと異なったのは、要因や背景を考える視点を提示せず、関連する複数の資料の提示のみを行い、生徒自身に必要な視点と資料の選択を行わせたことである。各グループの発表では、自然環境や気候の地域による違いとの関連からだけ



だけでなく、沿岸部への経済開発区の設置による工業化との関連から地域格差の要因を説明できていた。(表5)

③「中国の地域格差は、どのような問題を引き起こしているのだろうか」(第3段階、4・5時間目)

資料を活用しながら主体的に取り組む様子が見られた。そして、環境問題や経済格差の拡大について現状を知ると、中国の解決すべき課題について「人口集中をなんとかしなければならぬ」と「これ以上格差が拡大すると新たな問題が発生するのでは」という意見があがった。中には、地域格差の問題が「島根の問題に共通している」「日本の大都市や工業地域でも見られる問題だ」ということに気付く生徒もいた。

成果と課題:教科構想に基づいて本実践を振り返る

○三分野を見据えた学習の発展や見方・考え方の成長を意識することで、この学習で形成された見方・考え方がこのあとの学習にどうつながっていくのか、見方・考え方をより成長させるためにはどうしたらよいのか、それぞれの内容との関連を図りながら単元の流れを意識した学習を進めることができた。

○小中の系統的な学習を意図した単元構造の開発と、それに基づく授業を開発・実践することができた。

○単元の問いに迫るための問いを3つの段階で設定し、見方・考え方を活用した学習をくり返すことで、地域格差の要因や背景を考えるために必要な見方・考え方を生徒自身が判断するようになった。第2段階では、これまでに習得した見方・考え方では説明がつかない事象に気付かせることで、生徒が主体的に知識を広げたり深めたりしながら見方・考え方を成長させようとする学びの姿が見られた。

●社会科全体を通した見方・考え方の成長を意識した単元構造として、小中の学習の連続性を「国民生活における情報の役割」に見出して単元を構造化した。公民的分野で最終的に目指す社会科における概念をより明確にした上で、どのような単元を「情報」の視点で学習するのか、各単元のねらいに迫るためにその視点での学習が効果的であるかを見直し、小中をつないだ社会科学学習の展開を考える必要がある。

●三分野を見据えた単元構造を考える場合、各分野における単元の関連性を見出すだけでなく、どのような段階を踏んで学習を進めていくかという観点からアジア州や他の単元の位置付けを行っていく必要がある。

●習得した概念的知識の汎用性を高め、説明できる段階にするには、資料の読み取りや追究過程での資料の活用を、小学校を含めた社会科学習全体で意図的に組み込んでいく必要がある。

社会的な見方・考え方を働かせた社会科授業づくり

1. 社会科を学ぶ本質的な意義

新学習指導要領では、教科の特色や役割といった、いわば教科の存在意義を示す教科目標について、前文（総括目標）と三項目の具体的目標から構成している。小学校の総括目標は「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す（傍点引用者）」である。各教科等の目標の冒頭にも同様に「見方・考え方を働かせる」旨が示された。『答申』（平成28年）では、「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」といった、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（思考の枠組み）だとしている。「見方・考え方」を働かせた学びの過程を通じて資質・能力は伸ばされ、また新たな資質・能力が育まれることによって「見方・考え方」が更に豊かなものになると考えられている。「見方・考え方」は、育成すべき資質・能力の全体にかかわるものであり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核になるものだと考えられる。

2. 授業づくりの柱となる「社会的な見方・考え方」

小学校社会科の「社会的な見方・考え方」（小学校社会科の学年目標では「社会的事象の見方・考え方」と表記）は、学習の問題を追究・解決する活動において、社会的事象の特色や意味などを考えたり（考察）、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したり（構想）するための「視点や方法」だとされている。「視点」は地理的（位置や空間的な広がり）、歴史的（時期や時間の経過）、社会的（事象や人々の相互関係）なものからなり、追究の「方法」とは、社会的事象を見出すこと、見出した事象を比較・分類、総合したり、関連付けたりすることと示されている。これらのことから、新指導要領では社会的事象の理解（考察）と学んだことを社会生活にいかすこと（構想）という社会認識と市民性の両面の育成が重視されており、これを社会科授業レベルでどのように実現していくかが課題となる。

3. 社会を知る、社会をわかる、社会にかかわる学習活動

社会認識と市民性の育成を重視した社会科授業に必要とされる学習活動として次の3つをあげたい。

- ・社会的事象に対して「どのようになっているか」と問いかけ、資料を収集して読み取り、知ったことをまとめる活動。
- ・社会的事象に対して「なぜか、特色は何か」と問いかけ、見出した事象相互の関係や意味・意義、特色を考え、わかったことをまとめ、伝える活動。
- ・社会的事象に対して「どうしたらよいか」と問いかけ、解決の方法や方策を判断して、その結果についてまとめ、説明・議論する活動。

「どのようになっているか」「なぜか、特色は何か」「どうしたらよいか」という「問い」を子ども自らが発見し、その答えを追究する社会科授業実践が求められるであろう。

（共同研究者：教育学研究科、加藤寿朗）